

## 銚田町鳥栖における村落組織 の特性とその形成要因

坂口 慶治・小野寺 淳・山本 充

### I はじめに

村落組織に関する従来の地理学研究においては、特定の地域の村落組織の性格を明らかにし、それが、住民の経済的・社会的行動にどのような影響を及ぼしているのかを解明した研究が多かった。たとえば、西野寿章は、同族結合村落と講組組合村落とによって、ダム建設にともなう移転形態に差異がみられることを明らかにしている<sup>1)</sup>。そうした研究においては、村落組織の性格は所与のものとして扱われており、その性格自身を地理的事象として詳細に考察する点が足りないといえよう。福武直は、同族結合の村と講組組合の村とを対置し、それぞれが、東北日本型、西南日本型という地域的類型を示すばかりでなく、前者から後者へと変化する発展段階の型をも示すと指摘した<sup>2)</sup>。村落組織の性格を地域的基盤の上に求めるこのような研究は、本来、地理学においてなされるべきであろう。

村落組織の結合状況の差異は、耕地の形態や土地所有、集落形態などによって、さらには、その地域の開発様式と村落の形成過程によって規定されている<sup>3)</sup>。地理学においては、すでに橋本征治が、砺波平野の一村落で、村落組織の特性を、その地域の社会形成過程との関係から考察している<sup>4)</sup>。このようなプロセスを通しての分析は、村落組織の特性を考える上で、確かに重要な方法である。

以上の観点にたち、本報告では、茨城県鹿島郡銚田町鳥栖地区について、村落組織の性格を明らかにし、その性格を形成してきた歴史的過程と地

域的要因を考察することを目的とする。鳥栖地区は、台地末端の塊村を中心とする鳥栖本郷と、台地上の路村を中心とする鳥栖新田との二つの行政区からなっている。本郷は、巴川の低地に若干の水田をもち、畑作と水稲作を組み合わせた農業経営を行っている。一方、新田の農業経営の中心は台地上での畑作にある。

### II 村落組織の特性

#### II-1 行政単位としての鳥栖

鳥栖本郷ならびに鳥栖新田は、江戸時代には、同一の藩政村をなしていたが、1889年(明治22)に、町村制の施行により、近隣の紅葉・菅野谷・大和田・上富田・当間各村と合併し、巴村を形成した。1876年(明治9)の地引絵図<sup>5)</sup>によると、鳥栖新田はその時点ですでに、本郷地区とは離れて明瞭な路村形態を呈しているが、当時はまだ、本郷・新田の双方を含めた区域をあわせて、巴村大字鳥栖と呼んでいた。その後、1955年に、巴村は銚田町と合併した。

銚田町では、行政の最小単位を区とし、町全体を68区に分けている。それによって、本郷と新田は独立の区となり、それぞれに区長・副区長(2人)・会計・事務の役職を置いている。また、本郷は児童館、新田は公民館にそれぞれ集会場を持っている。ただ、区としての独立とは別に、本郷と新田が一緒になって、銚田広域消防団の第6分団を組織しているほか、小学校区も、下富田にある巴第一小学校の学区に属している。

区の単位の活動としては、新年会を兼ねた総会

が、本郷では1月10日、新田では1月4日に、各集會場で開催される。そこで、前年度の事業報告や役員を選出、事業計画などが協議され、自治会的機能を果たす。全構成員が参加する総会は、この新年会のほか、臨時に重要な事業のある時に限られており、平常的な道路普請などの取り決めは、区の下部組織である班の班長によって構成される役員会で行われる。

## II-2 組・班組織の機能

前述の行政的・自治会的組織の区と、連絡組織的な班との中間に、組という冠婚葬祭などの互助組織が存在する。本郷は、峰・打手・下寺の3組に、新田は、上宿・中宿・下宿の3組に分割されている(第1図)。このうち中宿は、上宿より明治初期、戸数増加のため分離成立したものである。なお、組には組長はおらず、行政的伝達は区長から班長へ直接行われる。この組は、基本的には竹内利美の言う“村組”に相当するものと考えられるが、ただ鳥栖においては、その空間的形態が竹内の指摘するような村落内を分画する地域単位にはなっておらず、非連続に分散しているのが特徴である<sup>6)</sup>。

組の下位の単位としての班は、現在では行政的伝達の末端組織として機能しているほか、納税組合の単位ともなっている。これは、竹内の言う近世の五人組制度に起因する近隣集団に相当すると思われるが、ここでは、竹内の指摘するような家並原則と基準戸数には規制されておらず、この場合も空間的に相離れた家々で、ひとつの班を構成している例が見い出される。また各班の戸数を見ても、本郷で5~11戸、新田で9~14戸となっており、各班の戸数は一定ではない。

このような班や組組織の空間的非連続性は、家々の系譜関係によるところが大きい。すなわち、本家と分家は空間的に離れても、同一の班に属する傾向がある。班の戸数が新田でより多くなっているのも、分家がこちらでより多く出たことによっている。なお、この点については、外部からの入村者も多く、その受け入れによっていること

もある。それゆえ、本郷における班の形が、より古い状態を留めているとみることができる。このように組・班という相互扶助的な近隣集団の空間的非連続が、系譜関係に規制されていることからみて、鳥栖の村落機構は、なにかんづく本郷においては、地縁的よりも、血縁的に決定づけられている面が強いと考えられる。とはいえ、ここにおいてはマケ・イトウといった同族集団が機能しているわけでもない。結局、同族的結合が、町村合併などで、地縁性ないしは近代性を多分にになわされるようになった組・班組織の中に、なおもしっかりと入り込んで現在の空間形態をあらわすようになった。

かかる性格を示す組・班を単位として、現実の生活活動が営まれている。以下にそれをみてみよう。

### a) 冠 婚

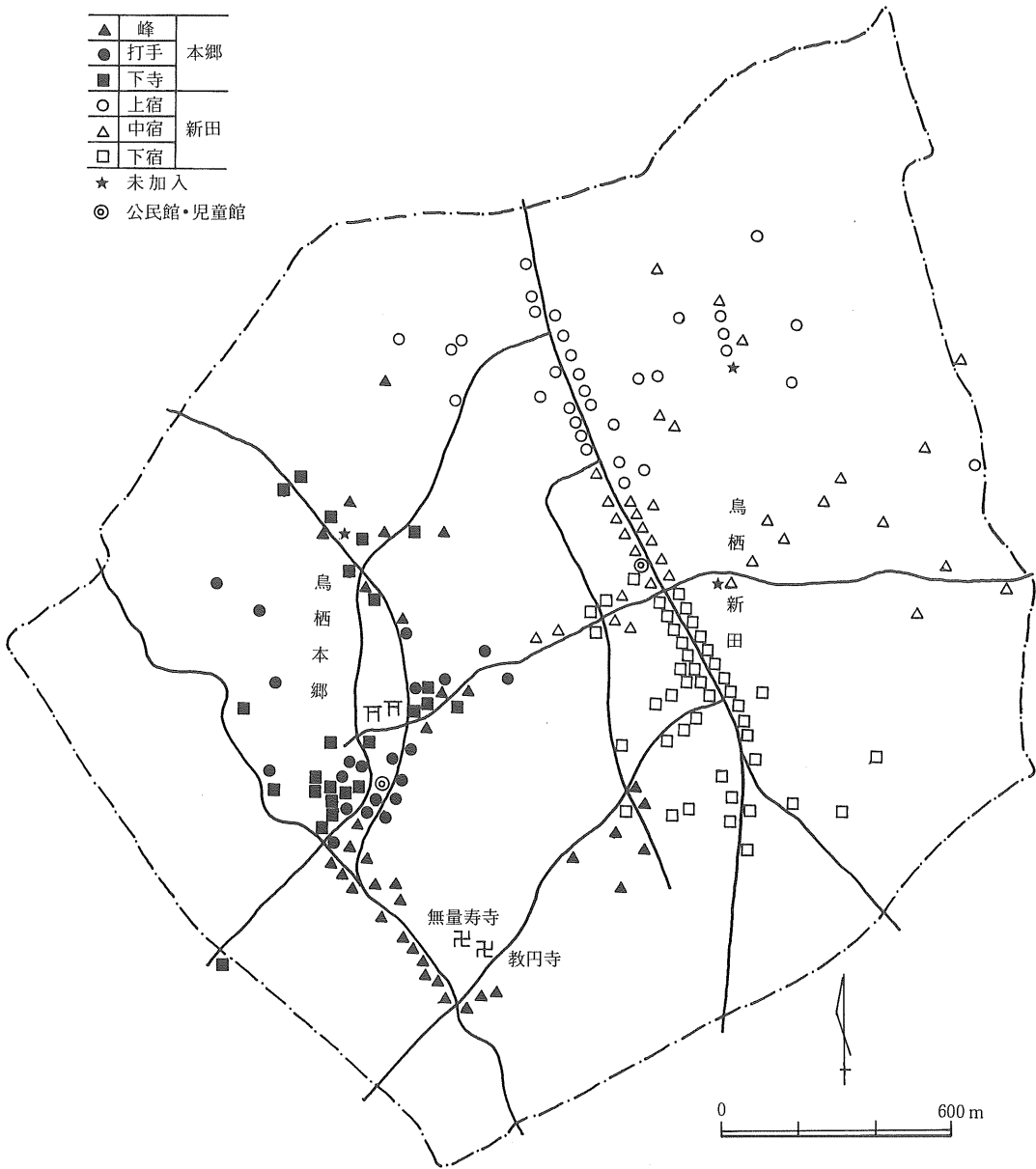
結婚式には、本郷の場合、親戚・知人のほか、同じ班の人が招待され、組全体が招かれることはない。祝金は、親戚・知人が2~3万円、班の人が1万円程度である。一方、新田では、長男の結婚式の時にのみ組全体の人が招かれる。したがって、100人を越す招待客になることがあると言う。長男以外の結婚の場合は、親類のみが招かれる。

出産後の節句の祝いには、親兄弟とともに、班ないし組の人が招かれる場合がある。この時、お祝いは、女性の名前で当家へ持って行く風習がある。その後の七五三は、親戚だけで祝われる。

### b) 葬 式

組内で人が亡くなった場合、その日の夜に組の男衆が集まり、葬式の日取り、帳簿役などの役柄を決定する。次の日から、組内の男、班内の女が準備にあたり、葬式の当日は、組内の男女全員が手伝う。ただし、新田の下宿は構成人数が大きく、世帯主・長男等、重要な人が亡くなった時のみ、組全体が手伝いにあたり、そうでない場合は、1・2班あるいは3・4班と、より小さな単位で手伝いにあたる。本郷では、本郷全ての人がお参りをする。香典は、古い分家の場合は3千円、同じ組の場合は2千円、異なった組の場合は1千円である。

▲	峰	本郷
●	打手	
■	下寺	
○	上宿	新田
△	中宿	
□	下宿	
★	未加入	
◎	公民館・児童館	



第1図 鳥栖における組組織の配置  
(聞き取りによる)

新田では、新田全ての人がお参りすることはない。というのも、新田の人口が大きいからであろう。この葬式の時に使われる食器は、各組(新田下宿では1・2班, 3・4班それぞれで)が、個々に保有している膳置場に保管される。

ところで、鳥栖では、新規居住者を除くほぼ全

ての家が、浄土真宗無量寿寺の檀家である。しかしながら、以前には無量寿寺に隣接して、教門寺・正楽寺の二つの下寺があった。そして、前者は本郷の、後者は新田の下寺となり、無量寿寺へ取り次いでいた。正楽寺が廃寺になる一方、1876年(明治9)に制定された真宗の「宗規綱領」により、

教円寺も独自に檀家を持つようになった。教円寺は、鳥栖新田周辺に新規に居住するようになった家を檀家とし、無量寿寺は直接、鳥栖本郷・鳥栖新田の檀那寺となった。

檀家からの寄付を集める檀家総代は、各組より計6人選ばれ、4年の任期を有する。以前は、大きな寄付のできる人が総代となったが、現在は、住職も加わった役員会で決められる。

### c) 祭 礼

現在、鳥栖の鎮守神は、本郷にある鹿島神社である。ここには、鹿島・息栖・香取の三兄弟神が祀られている。これは明治期に入り合祀されたものであり、それ以前はそれぞれ異なる場所に祠が存在していた<sup>7)</sup>。そして、本郷は鹿島神社を、新田の上宿・中宿は息栖神社を、下宿は香取神社を鎮守神として祀っていた。

鹿島神社の祭りは12月5日に行われる。新年会で選ばれた4年任期の神社総代が、本郷・新田の各組から計6人で、玉串を奉納する。ここでは、本郷の神社総代が上手となり、序列が認められる。その後、集まってきた人々にもちをまく。

このまきもちやしめなわの準備は、まかない番、あるいは当屋と呼ばれる家が行う。この当屋は、本郷・新田とも、それぞれ毎年各組で持ち回りとなる。さらに組内においても、毎年各班で持ち回りとなっている。本郷では、その年、当屋をだした組と、次の年、当屋をだす組とが、祭り当日神社に集まって酒を飲む。そして、くじをひいて翌年の当屋を決定し、神社の太鼓をたたきながら、その家へ知らせに行く。当屋がでる予定の班内の家全ては、それぞれそれまでに、料理をつくって待っていなければならず、当屋が決定した段階でその料理を当屋の家へ持ち寄り、組全体が集まって当屋になったことを祝う。当屋はさらに、毎月1日と15日に神社の清掃をしなければならない。新田においても、くじをひいて当屋が決定されるが、下宿では、くじびきが行われなくなり、回覧板を回す順に当屋を回している。一方、もち・お供え用の米は、鎮守様の田と呼ばれる共有地で作られた。本郷が1反、上宿・中宿で1反、下宿で1反

所有しており、以前は共同で耕作していたが、現在では小作にだして、その小作料でまかなっている。

また、鹿島神社に隣接して、阿波<sup>8)</sup>大杉大明神が祀られた大杉神社がある。約250年前、ライ病が流行した時に祀られたものといわれている。祭りは5月11日に行われ、本郷・新田それぞれで、山車をねり回していた時期もあったが、約20年前にやめられた。

以上、組・班が、冠婚葬祭の各種儀礼を行う上で、重要な組織単位となっていることがみてとれる。しかしながら、この組・班と、その上位レベルの組織との階層的関係は様々である。区として本郷・新田はそれぞれまとまっているほか、大杉神社の祭礼においても、本郷・新田がそれぞれひとつの単位となっている。一方、神社総代・檀家総代のように、本郷・新田のレベルを経ないで、直接、神社・寺と各組が結合している場合がある。さらに、鹿島・香取・息栖神社の祭祀形態においてみられたように、本郷と、新田の上・中宿と、下宿とが、同じレベルの組織として存在していたこともあった。また、結婚式・葬式などの手順において、本郷と新田に差異がみられる。これらのことから、比較的早い時期に、本郷と新田がそれぞれ独立していたことが示唆される。さらに新田内部においても、上・中宿と下宿とが、やはり早くから独立的であったと考えられる。

ところで、こうした組・班が家々の系譜関係を基盤としているとみるならば、各種儀礼は、同族的結合を基礎として行われているわけで、そのことが、本郷と新田に差異をもたらしているともみなせよう。ただし、いずれにしても、双方とも空間的に非連続な社会組織に依拠している点で、地縁的結合は弱体である。それは、講組織が、本郷・新田を通じてひとつしか存在しないことからもうかがえる。

一方、こうした組・班組織に依拠しない組織もある。次に、そうした新しい組織の形成状況をみてみよう。

### Ⅱ－3 生産組織の状況

まず、農業生産に関する組織として農協があげられる。鳥栖は、銚田町農協巴支所の管轄域に入っているが、農協の生産物取扱い量は小さい。

農協には各種の生産部会が存在し、共同購入や共同出荷など効率的な運営を計っている。鳥栖では、カボチャ部会に本郷・新田それぞれ3人・8人、メロン部会に7人・19人が加盟しているほか、新田から加工パレイショ部会に9人、加工トマト部会に5人、トウモロコシ部会に3人、ゴボウ部会に2人が加盟している。また、農協とは別組織として養豚組合があるが、これには本郷から1人、新田から6人が加入している。これらの数字は、それぞれの作物を栽培している加入可能な農家数に比べると極めて低い。たとえば、トウモロコシ栽培農家は、本郷・新田でそれぞれ、13戸・32戸、ゴボウ栽培農家は、62戸・42戸であり、豚飼養農家はそれぞれ、6戸・14戸である。これら部会に非加入の農家は、生産規模が小さく自家用分のみを生産している場合のほかは、個人的に、あるいは任意組合を通して生産物を出荷している。

この任意組合は、2～3人の小規模なものから、20人近くの規模の大きなものまで、さらに、単品のみを扱うものから、多品目を扱うものまで、多種多様な形で存在している。たとえば、新田のA家は、豚130頭を飼育するほか、メロン・ヤマモ・サツマイモを栽培している戦後の分家農家である。農協に加盟しているものの、豚・ヤマモ・サツマイモは個人的に出荷する一方、メロンは、同じ市場へ出荷する他町村(旭村・小川町)の栽培農家と3人で、M園芸組合と呼ぶ任意組合を結成し、それを通して出荷している。また、新田には20人からなる任意組合、T組合がある。1968年にピーマンの出荷組合として発足したが、その後、メロン・ヤマモが主体となった。20人のうち、7人は農協のメロン部会にも加入しており、価格の動向により出荷先を決定していると言う。新田には、この他、サツマイモ・インゲン豆を主として扱う2つの任意組合がある。一方、本郷には、キク生産農家による任意組合がある。半原の生産

家と共に設立した銚田町生花組合の第二支部を10戸の農家で形成している。

以上みてきたように、鳥栖においては、農協を通しての共同出荷よりも、個人・任意組合を通しての出荷が極めて多い。また、よいと呼ばれる共同労働も、大正初期までなされていたが現在ではなくなった。こうしたことは、非常に多品目にわたる作物を栽培していること、東京という大市場に近いことなどによるところが大きい。村落内の地縁的な結束が脆弱であることのあらわれでもあると考えられる。

### Ⅱ－4 レクリエーション組織の状況

レクリエーション機能を有する組織として青年会・婦人会・老人会がある。青年会の活動は現在ではなされていない。婦人会では、赤十字や歳末助け合いの募金活動を行っており、本郷では比較的活発に活動している一方、新田では上宿の一部を除いて加盟している人はいない。老人会には、本郷が55人、新田が77人、会員となり参加しており、クロッケー競技や温泉旅行などを行っている。しかし、本郷・新田のそれぞれの老人会の年間活動日数(1982年)は、19日・12日であり、銚田町に51存在する老人クラブの平均年間活動日数27日より極めて低い数字を示している。

また、銚田町では、教育委員会内に体育協会を設け、各種スポーツの推進を行っている。現在、野球・ソフトボールなど11種目の連盟が活動しているが、鳥栖からの参加は少ない。

このように、鳥栖においては、各種レクリエーション組織の組織化も低く、とくに新田においてそれがより一層顕著となっている。

以上、鳥栖における種々の社会組織の特性を概観してきた。このことから、鳥栖においては、本郷と新田の関係が薄く、互いに独立的であること、さらに新田内部においても各組が独立的に存在していることがわかる。さらに、組・班組織が空間的に非連続であり、地縁的な結合が脆弱であること、それとの関係は不明瞭ながらも、生産・レクリエーションの組織化があまり進展していないこ

とがみてとれる。そして、この傾向は本郷より新田においてより強い。

こうしたことの要因としては、第1に、従来から一般的に言われているように、畑作地帯の特徴である。灌漑・排水など共同労働を余儀なくされる水稲作に比べ、畑作では、必ずしも多くの共同労働を必要としない。とくに、この鳥栖においては、非常に多種類の作物が分散的に栽培されている。それぞれ、播種・収穫時期が異なるため共同作業はできず、また同時に、農閑期が各農家で異なるため、共にレクリエーションなどの活動がやりにくくなっていく。水田を有する本郷についても、畑作を兼営するところから、新田とは多少の差を示しながら、似た状態が生まれている。

第2に、鳥栖が、本来は本郷・新田のいずれにおいても、農業以外の機能を兼ねもった村落であったと推察されることである。すなわち、本郷は巴川のひとつの河岸として機能していた時期があり、新田の場合も、組の名称である「宿」と、その路村形態から、交通集落として機能した可能性がある。そうした時代には、農業が副次的な役割しかもたなかったこともあったかもしれない。

第3に、組・班の同族結合が弱体化してきている一方で、地縁的結合がまだまだ成熟しない過渡的な段階にあることである。

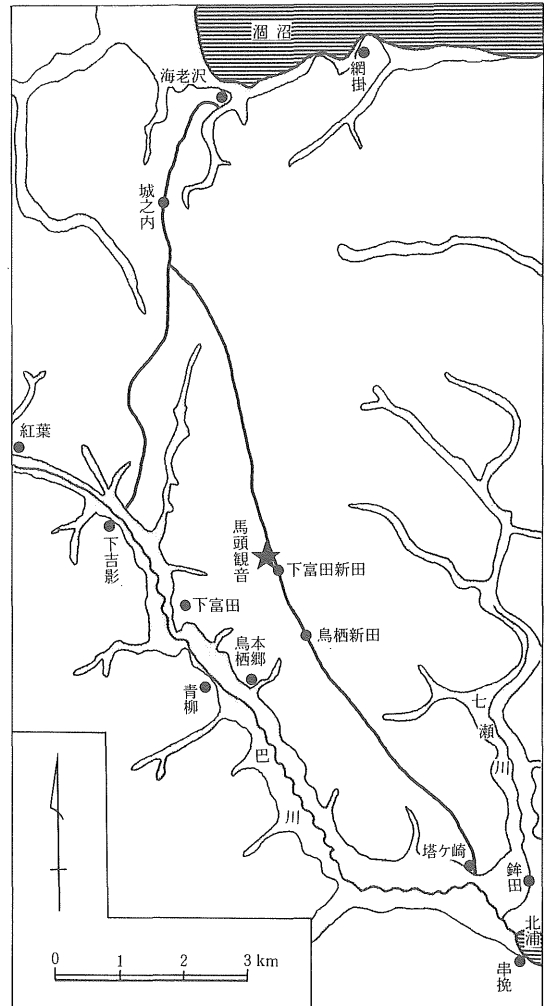
これらの諸点を、さらに歴史的過程から考察する。

### Ⅲ 村落組織の形成要因

#### Ⅲ-1 近世鳥栖新田の成立と変容

##### a) 交通集落としての路村景観

鳥栖の集落起源は、鎌倉時代初期にさかのぼることができるであろう。すなわち鳥栖は、鎌倉時代初期の「烟田文書」にすでにその名を記されており、鹿島氏一族の烟田氏の所領であったといわれている<sup>9)</sup>。また鳥栖には親鸞二十四輩の第3番光明山無量寿寺があり、無量寿寺は中世以来鹿島真宗門徒の信仰を集めてきた。中世鳥栖の集落について、資料的に明らかにすることはできないが、常識的には谷津田に挟まれた台地の先端に位置する



第2図 海老沢河岸から北浦への近世交通路  
資料：陸軍部測量局、2万分の1迅速図。  
1885年(明治18)

現在の鳥栖本郷に「疎なる集村」<sup>10)</sup>を形成していたと想定しうる。一方、台地上に路村景観を示す鳥栖新田は、近世に成立したと考えるのが妥当であろう。そして短冊状耕地をもつ路村では、一般的に共同体的な規制が弱いと考えられる。そこで本節では、現在の鳥栖においてみられる社会的な結合関係の弱さという特性を解明するため、乏しい資料からできうる限り、路村鳥栖新田の成立と変容について考察していく。

近世の鳥栖は、明治初期の「旧高旧領取調帳」<sup>11)</sup>によれば、旗本坪内氏の支配で石高755石1斗7

升3合であった。この石高は、霞ヶ浦・北浦沿岸では中規模の藩政村といえる。また坪内氏は、隣村の下富田に23石7斗7升3合の石高を持っていた。下富田は、坪内氏と同じく旗本三宅氏307石8斗4升2合との相給支配であったが、鳥栖新田につらなる路村の下富田新田を含んでいた。おそらく路村という共通点から、鳥栖新田は下富田新田とほぼ同時期に成立したのではないかと考える。

鳥栖新田と下富田新田の屋敷が並ぶ道は、第2図に示したように、南は塔ヶ崎へ北は海老沢へと通じていた。近世の塔ヶ崎と海老沢は、ともに河岸集落であった。すなわち、この道は酒沼と北浦を起伏の少ない台地上にはほぼ直線の最短距離で結んでおり、馬による陸送に適した交通路である。

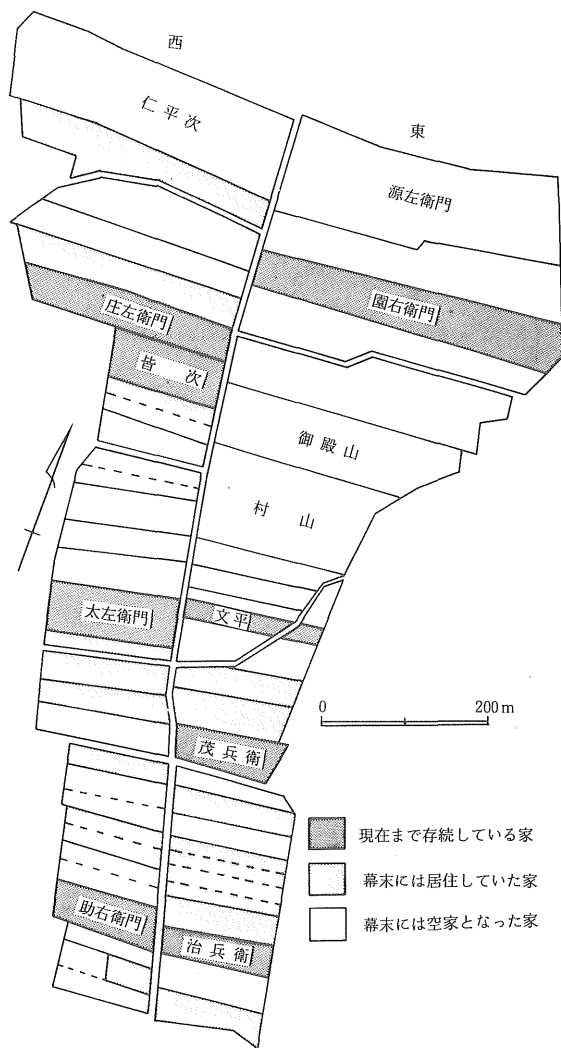
那珂湊より酒沼に入り、北浦から利根川へ出るルートは、東北諸藩の廻米や東北幕府領の御城米の輸送ルートの一つとされている。このルートをどの藩が主に利用し、その利用度がどの程度であったかは明らかにされていないが、鹿島灘を乗り越き銚子あるいは房総半島を経由するルートよりも安全であったことは確実である。しかし、このルートの難点は酒沼から北浦への輸送で、勘十郎堀の失敗が示すように、17世紀後半に巴川舟運が開かれても一部陸送を余儀なくされていた。酒沼の海老沢河岸より巴川の下吉影河岸までの道は<sup>12)</sup>第2図に示したが、約2里(7.8km)であった。従来、この道を陸送して巴川舟運を利用するルートが、強調されてきた感がある。しかし、巴川は蛇行が激しく90~60俵積<sup>13)</sup>の解下船しか通船できず、輸送量に限界がある。

それゆえ、鳥栖新田と下富田新田を通過する海老沢-塔ヶ崎間の道が、東北諸藩の江戸廻米ルートや東北幕府領の御城米ルートとして利用された可能性は否定できない。この根拠として2例をあげよう。一つは、海老沢-塔ヶ崎間のどの道を通ったかは記されていないが、「茨城県史 市町村編Ⅲ」に幕末の文久年間に御城米が海老沢-塔ヶ崎間を陸路で輸送されたことが指摘されている<sup>14)</sup>。次に、1809年(文化6)の「馬頭観世音」が富田村馬持中によって、第2図に示した地点に建てられて

おり、馬稼をしていたことが明らかである。この2点から、武蔵野新田が馬稼をしていたごとく、同様の路村景観を示す鳥栖新田と下富田新田は、畑作と馬稼を生業とする、いわば交通集落であった可能性を指摘したい。

### b) 幕末期鳥栖新田の復原

鳥栖本郷には、領主坪内氏の知行地を現地支配する最高責任者として、割元名主の田崎氏が屋敷を構えていた。しかし、田崎氏は明治期に政治家



第3図 幕末期鳥栖新田の集落形態  
— 1858年(安政5)—  
資料：1872年(明治5)播高名寄書上帳。  
新堀太郎右衛門家蔵

となったタケタロウの代に没落したといわれ、割元名主が所蔵していた公文書も現在は残されていない。また、鳥栖本郷と新田の旧家を資料所在調査した結果、近世の公文書は皆無といっても過言ではない。唯一現存する近世の公文書は、新堀太郎右衛門家所蔵の(播高名寄書上帳)とでも名づけるべき縦帳1冊のみである。この文書は、1872年(明治5)の写本であるが、1858年(安政5)における所有者別の耕地と山林を列挙し、耕地に仕付ける粃の量を書き上げている。しかし内容的に耕地面積が記されていないため、利用には一定の限界がある<sup>15)</sup>。そこで、ここではむしろ付記のように記された「新田屋敷順帳」をとりあげた。「新田屋敷順帳」は、1858年(安政5)当時における鳥栖新田の居住者名が上下段に区別して書かれている。このため、「新田屋敷順帳」より幕末期鳥栖新田の復原をおこない、鳥栖新田の成立とその変化過程を明らかにしたい。

復原図である第3図は、次の手順によって作成した。まず、新田の旧家から屋号あるいは記憶している先祖の名を聞きとり、「新田屋敷順帳」の居住者名と符号させ、現在も存続している家を確定した。この結果、「新田屋敷順帳」の上段が東側の並び、下段が西側の並びを記していることが明らかとなった。そこで、1890年(明治23)の地引絵図から短冊地割の部分を図化し、「新田屋敷順帳」の居住者を割り当てていった。なお、幕末の「新田屋敷順帳」に記された居住者の配列に従うと、明治中期の地引絵図の地割を分割する必要が生じる箇所があり、これらの箇所は推定して破線を書き入れた。

第3図より、まず地割に注目すると、武蔵野新田のような均等配分がなされておらず、居住者の上層と下層の差が歴然としている。ことに最北端の東西両短冊地割は、最大同一面積であり、新田の草分の所有であったのではないか。「新田屋敷順帳」では、幕末にはすでに空家となっていたが、東側を源左衛門、西側を仁平次の元屋敷と記されており、この両家の子孫は現在鳥栖本郷に居住している。

次に戸数に注目すると、幕末における戸数は、東側で12戸、西側で14戸となり、合計26戸にすぎない。しかし、幕末に空家であった戸数を合わせると、東側に24戸、西側に31戸であり、合計55戸となる。すなわち、鳥栖新田は最盛期には55戸もの集落であったにもかかわらず、幕末期には約半数の26戸に減少していたことが明らかとなった。

鳥栖新田の成立時期と戸数減少の理由を明らかにする資料は見出しえなかった。けれども、鳥栖現住者の大半を檀家とする無量寿寺の過去帳によれば、1760年代の明和期にはすでに鳥栖新田は成立している。また戸数減少の理由は、仮に鳥栖新田を交通集落とみれば、巴川舟運の発展と陸路による馬稼の衰退として把握ことができよう。この点については、下吉影を始めとする巴川沿岸の河岸集落と、鳥栖新田と同様の路村である下富田新田において、近世文書の発掘が必要である。

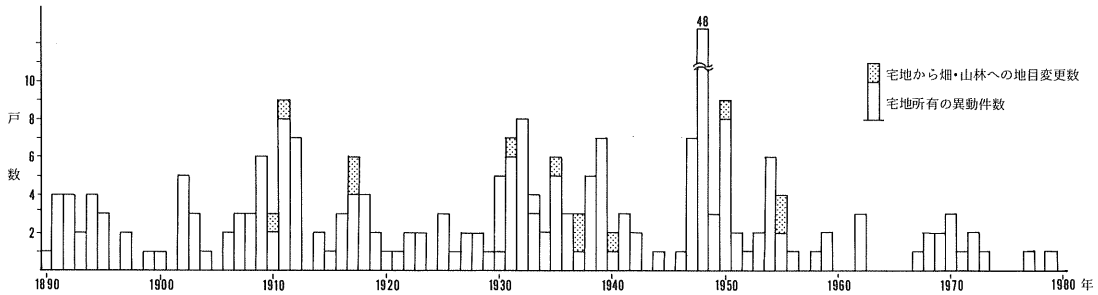
### Ⅲ-2 明治以降の鳥栖における村落組織の形成

#### a) 宅地所有の異動

日本の明治以降の近代化の波は、農村にも多大な影響を及ぼし、農業の近代化・商業化が進む一方で、それに対応できない農民層も生じてきた。ここでは、鳥栖の状況を、まず第1に宅地の所有の異動から考察していこう。

第4図のように、宅地所有に大きな異動を生じた時期が4期あった。すなわち、1907~1912年(明治40年代)、1914~1919年(大正期)、1929~1942年(昭和初期)、1947~1955年(第2次大戦後)である。第1の時期は、明治40年代の不景気時代に相当し、農業においても、米価問題が重大化し、小作争議が全国的に発生していた<sup>16)</sup>。第2の時期は第1次世界大戦下にあたり、農村の商品生産が発展したにもかかわらず、農家経済は悪化していた<sup>17)</sup>。それに伴い、零細貧農は、都市の労働力需要の増加とも相俟って、兼業・出稼ぎ・離村離農に走った時期でもあった<sup>18)</sup>。第一次世界大戦後は、戦後恐慌によって農民の離農離村が著しく促進されたとされるが<sup>19)</sup>、鳥栖の宅地所有状況にはそうした変化





第4図 宅地所有者の異動件数  
(土地台帳による。ただし、譲渡・相続による異動を除く197戸分について示した。)

はあらわれていない。むしろ、第3の時期のいわゆる昭和恐慌時に顕著となる。日本経済の混乱が農業にも及び、農村の窮乏が極度に達した時期であった。第4の時期の変化は大半が自作農の創設によるものである。しかし、この時期もまた、第2次世界大戦後の急激なインフレ時代にあたる。

宅地所有の異動が、農村の凋落傾向をうつすとすれば、鳥栖もまた、第1次大戦後の戦後恐慌期を除いて、全国的な趨勢に従っているといえよう。また、変化の増大するそれぞれの時期には宅地から山林ないしは畑への地目変換がみられており、農家の転出を伴っている状況を物語っている。

こうした全国的な経済恐慌の波に対して、鳥栖がどのような形で対応したのかを、以下で示してみよう。鳥栖においては、明治以降漸次、農家戸数の増加がみられ、その数は、恐慌時の戸数の減少を優に上回っている。そして、1941年には、明治初期の戸数の約1.7倍に及んでいる。日本の村が通例、明治以降大きな戸数の増加を示さず、精々が1～2割であること<sup>20)</sup>をかながみると、鳥栖は異例である。この戸数増加は、大半が分家によるもので、脱落農家を生じながらも、それを残留農家の分家によって穴うめする形をなし、結果的には、集落規模が拡大、発展する傾向を示した。その要因としては、もともと本郷・新田とも交通集落としての機能を持ち、農業依存度が相対的に低かったこと、集落の周囲に開拓可能な広大な山林原野を残していたことが考えられる。また、明治以降、鳥栖周辺では薪炭生産が盛んとなり、この薪炭業

への依存が強かったことも考えられる。

次にこの戸数の増加が空間的にいかに拡散していったのか、年次を追って考察する。

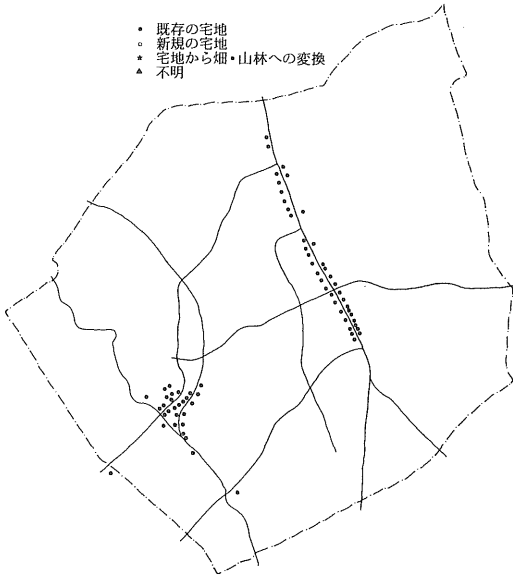
#### b) 宅地の空間的拡散

明治初期の鳥栖の土地利用は、1876年(明治9)の地引絵図により復元される。これによると、本郷の集落は台地末端で塊村状をなし、巴川の低地に水田が、台地上に集落を取り巻くように畑地が開かれていた。一方、新田の集落は、南北に走る道路に沿って路村形態をなし、各家の背後に短冊状の耕地が並んでいる。鳥栖地籍内には、まだ広大な面積が林地・荒地として残っており、これが後の開発と戸数の増加を可能にした。

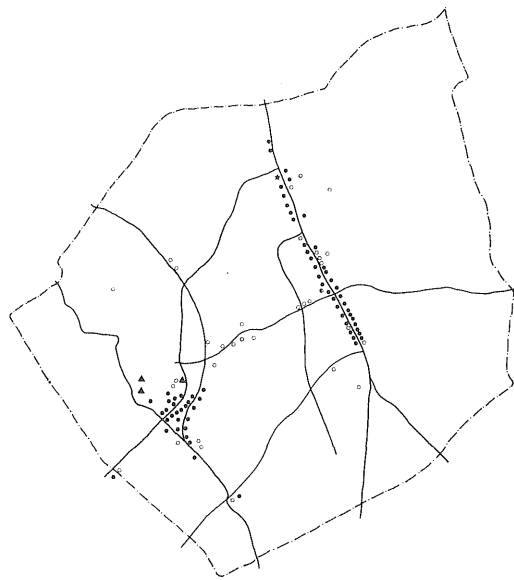
その後が増えた家の配置状態は、第5図に示すとおりである。明治から大正初期(1914年まで)にかけて増えた家は、本郷では、北部から東部の台地上に拡がり、集落の中心から離れ、かつ分散している。一方、新田では、主として従来の家並に沿って展開するが、そのほかでも、集落から比較的近距离の範囲に限られている。本郷・新田とも戸数の増加は、分家によるものであるが、本郷から新田への分家はただ一例が認められるだけであり、本郷と新田の独立が、すでにこの時期以前に確立していたとみなされる。

1914年から1941年(第2次世界大戦前)は、前期の傾向を持続させている。新田においては、前期よりもやや集落から遠く離れた場所への進出が目立っている。その一方で、旧集落内では離村する農家もかなりみられる。全体としては、増加の

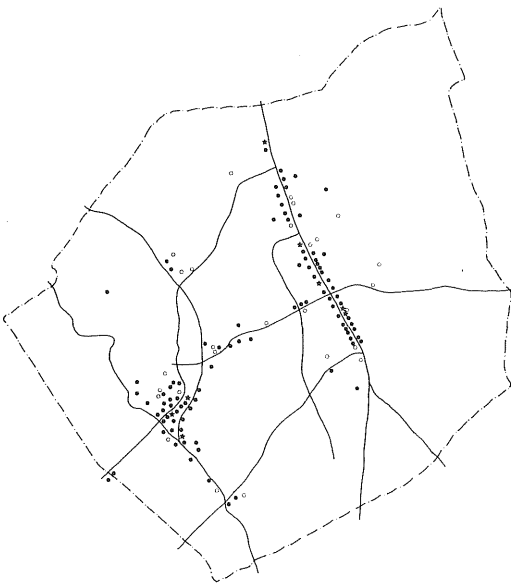
- 既存の宅地
- 新規の宅地
- ◐ 宅地から畑・山林への変換
- ▲ 不明



(i) 1889年以前



(ii) 1889年～1914年



(iii) 1914年～1941年



(iv) 1941年以降

第5図 鳥栖における宅地の空間的拡散  
(土地台帳および聞き取りによる)

傾向を示すが、本郷から新田へ、新田から本郷への分家の進出はみられない。

1941年から現在までは、それ以前の増加戸数にも匹敵する戸数の増加をみた。新田の東部および南部の広い未開発地域での増加が顕著であり、それらは分散して散村の形態をとっている。新田での増加が、本郷の増加を大きく上回っており、いずれも自作農創設によるところが大きい。とくに新田においては、農家の次・三男および村外者からなる開拓組合が結成され、開墾を推進した。村外からの入植者とはいえ、戦時中に縁故疎開してきた者や、都会からのUターン組といった、鳥栖とはなんらかの縁故関係を持つ人々であった。しかしながら、こうして集落の約半数の家が戦後に成立していることは、ひとつの共同体として成熟するだけの時間を十分に経てはいないことをあらわしている。これは新田について、よりいえることで、第Ⅱ章で指摘したその社会的結合の弱さと符合する点である。

#### c) 本・分家と組・班の重層関係

以上のように、戦後開拓の一部を除いて、戸数の増加は分家によるものであった。こうした本・分家関係という血縁的結合が、組・班組織にいかなる影響を及ぼしているであろうか。

第6図に一例を示したが、それには明確な対応

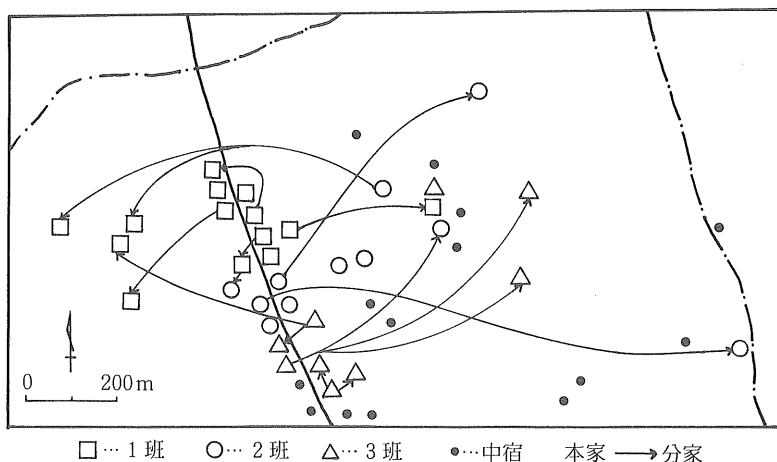
関係がみられる。すなわち、ある家から分家した場合、本家からいかに離れていようとも、また、近隣に他の組・班に属する家があろうとも、本家と同一の組・班に属する関係である。その結果、第1図で示したように極めて複雑な組組織を形成するのである。

しかしながら、それによって同族的結合の強さばかりが前面に出るわけではない。分家は散村の形態をとって存在しており、耕地を自宅周辺に所有していることが多い。集落から、そして本家からの距離の抵抗は、本分家間の結合を弱くする方向に作用する。また、豊富な未開墾地は、分家層に対して本家に依存せずにやっていけるだけの耕地を与えたと考えられる。こうして同族的結合も弱められる一方で、組・班の地縁的再編成も進まず、結局、全般的な社会的結合の脆弱性を生み出すことになったと考えられる。

#### Ⅳ おわりに

本稿では、銚田町鳥栖地区において、村落組織の特性と、それを形成してきた歴史的過程を考察した。その結果、以下の点が明らかとなった。

鳥栖においては、組・班組織が、冠婚葬祭の儀礼上、重要な組織として存在しているが、その構成空間は非連続な形態を示している。班組織と、



第6図 新田上宿の班組織と本分家関係  
(聞き取りによる)

その上位の組・区組織との階層的關係は様々であり、本郷と新田、さらには、新田の上宿・中宿と下宿の分離独立性を示唆している。また、農業生産上の組織化は低く、個人的、あるいは任意組合を通しての出荷が卓越する一方、レクリエーション組織の活動も不活発である。以上の諸点より、鳥栖は村落としての社会的統合が比較的弱いことが明らかとなった。

この特性の要因を、その形成過程を通して考察した結果、第1に、過去に交通集落として、農業への依存度が低かったことがあげられる。本郷・新田とも、かつては交通集落としての性格があり、農村としての共同体的性格は弱かったとみられる。

本稿を作成するにあたり、鉾田町役場・鉾田町教育委員会・鉾田町公民館・鉾田町立図書館・鉾田町農協・法務局鉾田出張所・無量寿寺、そして鳥栖本郷・鳥栖新田の多くの方々にお世話になりました。また、資料収集にあたり、筑波大学の石井英也助教授に御助力いただきました。ここに記してお礼を申し上げます。

#### 〔注および参考文献〕

- 1) 西野寿章(1981):「ダム建設にともなう水没村落の移転形態と村落構造 — 奈良県十津川村迫部落と福井県今庄町広野二ツ屋部落の場合 —」. 人文地理, 33-4. 1~24.
- 2) 福武直(1949):「日本農村の社会的性格」. 東京大学出版会, p. 298.
- 3) 福田アジオ(1982):「日本村落の民俗的構造」. 弘文堂. p. 65.
- 4) 橋本征治(1969):「散居村における社会構造の地理学的研究」. 人文地理, 21-6. 1~28.
- 5) 水戸地方法務局鉾田出張所蔵.
- 6) 竹内利美(1957):「組と講」. 「郷土研究講座二」. 角川書店. 235~256.
- 7) 小字名として、西鳥日子・中鳥日子・東鳥日子が残存しており、それぞれ社の位置を示すものと思われる.
- 8) アンバと発音する。鳥栖では、アワと呼ばれ、既に信仰が消失してしまったことを示している.
- 9) 瀬谷義彦監修(1982):「茨城県の地名」. 平凡社. 369~370.
- 10) 木村礎(1978):「日本村落史」. 弘文堂. p. 21. 「疎なる集村」は近世の「密なる集村」に對置して名づけている.
- 11) 木村礎校訂(1969):「旧高旧領取調帳 関東編」. 近藤出版社. 406~407.
- 12) 海老沢一下吉影間の陸送について、金沢春友は「牛を利用し、毎日数百頭の牛で午前午後2回往復」と記している。しかし、牛利用の根拠が示されておらず、金沢春友の説を受け入れることはできない。馬か牛かについては、今後の課題である。金沢春友(1974):「水戸天狗党と久慈川舟運」柏書房. p. 198
- 13) 小川町史編さん委員会(1982):「小川町史 上巻」. 小川町. p. 561.

第2に、鳥栖においては、本・分家關係が組・班組織に入り込み、空間的に非連続な組織をなしていた。しかも、本・分家間の距離の摩擦は、その共同的關係を脆弱化させる方向に作用した。第三に、現在の鳥栖の農家の約半数が、第二次大戰後に成立したもので、ひとつの社会的共同体として成熟するだけの時間をまだ経ていないのである。第四に、畑作經營を主としていることもあげられる。

本稿では、土地所有の規模や分布と村落組織形成との關係についての綿密な分析が、まだできておらず、それを今後の課題として残しておきたい。

- 14) 茨城県史編さん市町村史部会(1981):「茨城県史 市町村編Ⅲ」, 茨城県. p. 200.
- 15) (播高名寄書上帳)によると, 鳥栖の石高755石 1斗7升3合のうち, 新高として227石 3斗6升3合と記しており, 新高は鳥栖新田の石高と思われる.
- 16) 栗原百寿(1976):「農業危機と農業恐慌, 栗原百寿著作集Ⅲ」, 校倉書房. p. 42.
- 17) 前掲15). p. 89.
- 18) 前掲15). p. 90.
- 19) 前掲15). p. 99.
- 20) 前掲3). 158~159.